

「食べる西洋美術史—『最後の晩餐』から読む」宮下規久朗／著 光文社新書 2007年1月発行
2階一般開架図書（請求記号:723）

著者は「食事こそはコミュニケーションの最大の手段である。また食事は宗教と芸術につながる文化であった。」と語っている。その言葉にとっても共感できる映画の記憶がある。古い記憶であるが確か「バベットの晩餐会」というタイトルで、いがみあった村人が豪華な晩餐によって互いに心を解き、許しあう・・・というほのぼのとした味わいのある作品であった。

この「食べる西洋美術史」では映画の世界で、食事あるいは食物の美術表現（またはコミュニケーションとしての手段）を振り返り、文化としての食事の意味を考える。キリスト教下での食べ物を描く事の意味と「最後の晩餐」、静物画の発達の意味など「食」という観点から西洋絵画の歴史の見直しと解説が新鮮で面白い。

「精霊の守り人」上橋菜穂子／作 偕成社 1996年7月発行
1階子ども読書室（請求記号:913/ウエ）

女用心棒「短槍使いのバルサ」は、新ヨゴ皇国の第二皇子を救ったことから、百年に一度に起きる国の存亡にかかわる怪異な事件に巻き込まれます。皇国の運命を導く聖導師によって建国の英雄に退治されたはずの水妖がその身体に宿ったとされ、帝から命をねらわれることになった皇子チャグムを守るべくバルサは、幼なじみの薬草師タンダや老呪術師トロガイの助けを借りて危険な旅を続けます。チャグムに宿ったものは果たして皇国を滅ぼす水妖なのか、そこには意外な真実が隠されていました。

上橋菜穂子が創りだすファンタジーの世界にはどこかなつかしい日本の原風景や伝説が織り込まれています。児童文学でありながら、幅広い年代に愛読され、数々の文学賞を受賞した本書がアニメ化され4月からNHK-B S 2で放映されています。 さあ、上橋ワールドへ！！

「ミオよ わたしのミオ」アストリッド・リンドグレーン／作 大塚勇三／訳 岩波書店 1967年9月発行
1階子ども読書室（請求記号:94/リン）

孤児ボッセは望まれない養子縁組によってつらい暮らしを余儀なくされています。顔も知らぬ父親を慕い、いつか自分をこの境遇から救い出してくれることを夢んでいます。

その切ない願いがかなったのでしょうか。ある日「はるかな国」に旅立つのです。その国では、夢に見た父親は王様で、ボッセは王子「ミオ」と呼ばれて、牧歌的な世界の中で幸福な日々を送ることになりました。友にも恵まれ、すべての憧れを手にすることができたのです。しかし、それでも、つらかった日々の思い出はミオの心からなくなることはありません。また、この平和な「はるかな国」にも残酷な騎士カトーの脅威があり、さらわれた子どもたちを救うため、ミオはカトーと対決することになります。ミオはカトーを倒すことができるでしょうか。

作者は、おとぎ話の形を借りながら、少年の切実な願いを描きました。今年、生誕100年を迎えるリンドグレーンのドイツ児童図書賞を受賞した代表作です。